

魂を癒し地球を癒すスピリチュアルブルー

インタビュー

葉祥明の世界

インタビューアー 熊谷えり子（でくのぼう出版編集室）

美しい絵本の世界から、宇宙色の愛のメッセージを送りつづける絵本作家葉祥明さん。北鎌倉の葉祥明美術館リラ館を訪ねて、お話をうかがいました。

（初出「でくのぼうライフ16号」1996年9月1日発行）

— 二十五年の、時を越えた記録 —
スピリチュアルブルー 葉祥明の世界

野原の画家から

— なぜ絵の道に入られたのですか。

葉祥明 僕は元々朝起きてどこかに通うという生活がにがてなので、大人になったら自由に生きたいと思ってたのです。それで何が出来るだろうと考えたら、小さい頃から絵を描くのが好きだったから、挿絵画家になろうと思ったんです。でもなかなか採用されなくて、それで創作絵本をかいて、それからこの道に入りました。

— 元々絵が好きだったのですか。でもなぜ画家ではなく挿絵画家になろうとしたのですか。

葉祥明 それは、ゴッホとかモジリアニとかね、病氣したり貧乏したり悲惨な人生を送ったことを子ども心にも知っていて、そうはなりたくないと思っただけです。挿絵画家は依頼があって絵を描くから職業として成り立ちますからね、いいです。

— いつ頃でしょうか、葉祥明さんの絵が一世を風靡したというか、そこいら中、葉祥明風の絵があふれた時期がありましたか。

これは、今からちょうど25年前に遡る1996年の7月頃に伺ったインタビューです。その深い洞察と、透徹した眼差しがとらえていた世界は、まさに令和（2022年現在）の今いわれはじめている人の霊性や次元上昇について、すでに予言のように語られており、さらに、これからの道を私たちが迷わずに真直ぐ進むための道しるべ（道案内人）ともなる、葉氏にしか語れない、深くそして優しい、色褪せることのないメッセージでした。

葉祥明 「ぼくのべんちにしろいとり」（至光社刊）という

のが第一作目ですが一九七三年頃でしょう。その本の中に野原があって、白い犬ジエイクが走りまわるんですよ。その広い野原を多くの人が気に入ってくれたんですね。それで「野原の画家」というふうに言われて、求められるまま水平線とか地平線とか木が一本とか描いていたんです。そうするうちに、どうして多くの人がこういう絵を欲するのかなあと考えたんです。そして実は僕自身がそういう大自然を欲していたことに気付いたのです。小さな頃親や兄弟に阿蘇高原に連れていってもらった頃の感動が心の中にあっただけで、それを絵をみてくれる人達から教えられたのです。ということ、多くの人達の心の中にもそういう大自然の風景がみたいという気持ちがあるんだということですね。

— 今、私達の身近に自然はなくなってきているし、地球全体大自然がどんどん破壊されていってますからね。

葉祥明 大自然が破壊される状況の中で、僕の絵の中に、それを求めたんですね。僕の絵の原点は元々、本当の大自然ですから、その大自然を絵の中でしかみられない状況自体、悲劇的ですね。世界の自然が危機的状況にあることを僕自身、すごく認識したし、そこを通し

て皆さんにも知ってもらえたらなという気持ちになっ
たんです。

—— 初めは単に職業として絵の道を選ばれたのに、作品を
描いていくうちに、どんどん意識が変わっていかれたの
ですね。

葉祥明 そうですね。後になって考えると、実は目的はそ
こにあったなと思います。

—— 野原から、どんどん広い宇宙や深い人間の本质にまで
迫っていかれるようになるわけですね。

葉祥明 ええ、人の求めるものを描くということで、自分
の内面の思想なり哲学なりがそれと分離していたんで
すが、近年は絵本というかたちに融合してきました。
だから、やっと僕はこのために絵本作家になったんだ
なってことを思い知らされています。

—— 最近の作品は絵本の中に、すこくメッセージが込めら
れていますね。

葉祥明 絵本というのは視覚的な面と言葉の力とで表現で
きる一冊のものですから、多くの人に、より自分の心
が伝えられるんだなということが分かってきたんです。

葉祥明 負担になると思ったら、逆により制作していく動
機づけになりましたよ。自分の思っていること伝えた
いことが、この場で伝えられる。そして自分の世界は
美と夢のやさしい世界ですけど、そういうのを描いて
いる僕自身が、世界中の子どもや動物がとても気にな
る。だから僕の絵の世界の奥にあるそういう現実世界
を、ここでは知ってもらいたい。戦争と地雷と動物実
験という現実、まさに美と夢と平和の世界と対極の
世界ですからね。我々はこの現世の中で、その両方を
知らなくてはいけないわけで、その中で力強く生きて
いかなくちやいけない。僕の絵を甘いだだけだという人
もいましたが、ここにきてくだされば両方のバランス
の中に生きていることがわかんと思います。

—— この美術館を通じて社会的活動をどうなさっているわ
けですか。

葉祥明 それは僕の仕事と思想が分離してたのを融合し
たように、スピリチュアリズムとか真理探求の哲学が
日常生活での実践に反映するように、そのためにこの
美術館という場が与えられたので、ここは各種エコロ
ジーやボランティア活動の情報のセンターに使えるな
と思ったんです。僕自身も絵や詩を使って、そのお
役に立てるようになっただけです。

一枚絵よりそういう意味では絵本の方が表現の可能性
が大きいわけです。

美術館を開設して

—— この美術館は建物全体とても素敵で、メルヘンの世界
を思わせるのですが、館内の展示をみせて頂くと、虚げ
られている動物や子どもたちの情報やそういう活動への
案内などがありびっくりしました。

葉祥明 実は自分の仕事と自分の思想や哲学とが分離して
いたのが、絵本の中で一緒になったように、この美術
館の中で僕の思想と生き方が一緒に表現できるという
ことに気付いたんですよ。

—— 元々この美術館は何故つくられたのですか。

葉祥明 いわさきちひろ美術館に行った時、ああ、生きて
いるうちにいわさきちひろさんにお会いしたかったな
と思ったので、それじゃ僕は今美術館に絵をみにきて
くれる方にお会いしたいなと思ったんです。

—— でも創作活動をなさっていくには、それは大変なこと
ではないですか。

—— 今、そういう展示以外の活動も、ここではなさってい
るのですか。

葉祥明 音楽会をやったり詩の朗読をしたり、今言ったよう
なお話をしたり、そういう場としても使っています。
あとはその総合の表現として、絵本をスライドに
とって大きなスクリーンに映して音楽に合わせて詩の
朗読をやります。文学性だけでなく、真理、人間の進化、
宇宙の進化に関わることを、美しく楽しく伝えること
を、僕はここでやれるのじゃないかなと思っています。

『あいのほし』は ターニング・ポイント

—— 先程葉祥明さんの絵本が甘いという話がありました
『あいのほし』という絵本をみますと、葉祥明さんの世
界は甘い夢などとてもない、地球の危機、死と再生を
真正面から描いた、これはすごい本だなと思いました。

葉祥明 これは僕の創作の中で、一つのターニング・ポイ
ントです。

—— どうやって生まれた絵本のですか。

葉祥明 エコロジカルな観点で考えていくと、地球はます



ます悪くなっていて、行く末は生命あるものは地球と共に滅びていく道を行っているわけですよ。滅びということは死ということですが、死とは何だろうと考えたわけです。僕には動物や子どもが大人の勝手な行動で死んでいくことに対して、耐えられない悲しみがあったんです。研究していきますと、死は死ではなくて新しい誕生、仏教的に言えば輪廻転生ですね。輪廻転生は人間の段階だけではなくて、地球の規模でも宇宙的規模でもあることがわかったのです。いわば

宇宙進化論ですかね。ですから僕は、これから地球で起こることはもちろん辛い苦しいことばかりですが、それは地球が新しい生命を得るための生みの苦しみだと思えたので、そのことを絵本に描いてみようと思っただけです。この絵本を描くことで、僕自身が絶望的になっていたのが、逆に希望を懐くことが出来るようになってきた、だから多くの人にも、そういうプロセスを通じてもらいたいと思ったのです。まず現実を、苦しみや悲惨を知ってもらおう。だけどそれに絶望せず、それを通過したところに希望があるということ、それを一冊の絵本に表現できたらと思ったのです。

——それでの『あいのほし』は反響がありましたか。

葉祥明 この本の前に『ぼくのあおいほし』という絵本があつて、やはり環境破壊が進んで子どもも地球もダメになってしまってお話なんです、これも出版後三年目位から出るようになりました。この『あいのほし』も同様に三年後位から出るようになりました。本当に今の時代は人類の歴史の中で、特筆すべき重要な時期だと思えますよ。

——絵本もただ美しいだけでない、こつこつものを求めている人がやはりいるわけですね。